

DXハイスクール伴走支援事業

# ブロック別の取組実践発表会

・研究協議会実施レポート

－ 12/5実施中国・四国ブロック－



### 実践発表会①（島根県立大東高等学校）

#### 実践発表内容

#### 実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	島根県立大東高等学校
発表テーマ	文理横断的・探究的な学びにおけるデジタルの活用方法
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取組の概要                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 島根県立大学の先生による、情報リテラシーの授業や生徒の生成AI演習</li> <li>● リコージャパン株式会社による、VRや360度カメラを活用したリモートフィールド演習</li> <li>● 地元IT企業による、映像編集実習や視覚情報のAIトラッキングを活用したデータサイエンス演習</li> </ul> </li> <li>■ 取組がうまくいったポイント                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 企業による生徒向け授業と教職員研修を同時に展開することで、教職員の学びにもなった</li> <li>● 教職員チャット・学校HPにより校内外への頻繁な発信を行うことで活動が広がっていった</li> </ul> </li> <li>■ 直面した課題                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 3年次に学んだデータサイエンスの内容を、自身の探究テーマに応用することが難しかった</li> <li>● 生成AIの校内活用は始まったばかりで、リテラシー面を含め、生徒がどのように効果的に活用できるかは検討中</li> </ul> </li> </ul>

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 探究テーマをデータサイエンスと関連付けるためには、家族・友人・地域の人など、具体的な人物が「データを使って何ができるようになると良いか」を考えることが有効</li> <li>■ 地元の農業や漁業など、IT以外の分野でもAIが活用されている事例を知ることは、生徒にとって大きな刺激となる。地域連携に関しては、必要に応じて大学からのサポートを受けられる体制を整えることが望ましい</li> <li>■ 生成AIを授業で活用する難しさは、技術が常に進化し続けていることに加え、生徒が指導を待たずに生成AIを使い始めてしまう点にあり、活用する上では工夫が求められる</li> </ul>
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 外部連携授業はどの生徒を対象に実施したか？ ⇒ データサイエンス受講者は文系生徒30名程度である。小規模であることが動きやすさにつながった</li> <li>■ 情報リテラシーに関する学びを経て、生徒の興味関心が高まる様子は確認できたか？ ⇒ 成果物を見ると、学びの前後では明らかにリテラシーが高まった内容となっていた。変化の見える化は、今後の課題とさせていただきたい</li> <li>■ どのように校内の推進体制を構築したか？ ⇒ ワーキンググループを編成した。また積極的な教員との個人的な会話や小さな取組から、周囲の教員へ自然発生的に広がっていくケースがあった</li> </ul>



### 実践発表会②（広島県立祇園北高等学校）

#### 実践発表内容

#### 実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	広島県立祇園北高等学校
発表テーマ	生徒の興味関心を高めデジタル課外活動の促進
発表内容 要旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取組の概要①：テーマの選定                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 事業の核となる探究テーマは「好きの追求」、すなわち生徒の興味・関心に基づいたテーマを設定した</li> <li>● その中でも、生徒の「好き」を象徴する部活動をテーマにすることを推奨した</li> </ul> </li> <li>■ 取組の概要②：探究の方法                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● データサイエンススキル習得のため大学監修による授業動画を作成し、さらに生徒の学習と教員研修を兼ねた</li> <li>● 数値化が可能なDX機器として、体組成計（Inbody）や球速・回転数を測定できるRapsodoを導入した</li> <li>● 広島カープやサンフレッチェ広島のアナリストによる授業を実施するなど、スポーツのプロからデータを用いた課題解決の手法を学習した</li> </ul> </li> <li>■ 取組の概要③：探究成果の活用                             <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本テニス学会や日本野球学会などの学会、県主催の「ひろしまAI部」等で、生徒による発表を実施した</li> <li>● 探究活動の成果を部活動に還元し、選球眼やミート力向上など、具体的な練習メニューへの落とし込みを行った</li> </ul> </li> </ul>

指導・助言者 によるFB	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「DXで新しいものを生み出す」ではなく、「DXで今あるものをよりよくする」という考え方は、DXの本質に合致しており、継続性の確保にも寄与する。 一方で、予算が確保できないことが教員の負担増につながらないように注意が必要</li> <li>■ 探究テーマを深めるために必要なデータを取得できる機器を導入できている。需要に即した機器選定が、効果的な探究活動の鍵となっている</li> <li>■ プロのデータアナリストによる指導や、「ひろしまAI部」参加企業を通じて、探究活動におけるAIやデータの利活用にプロや企業の視点を取り入れたことは良い取り組みである</li> </ul>
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 探究テーマに部活動を推奨した背景はなにか？ ⇒部活動を探究テーマとしていた生徒の目の輝きが違った。さらに野球部が準優勝するなどの成果に結びついた実績があったことにより、テーマとして推奨するに至った</li> <li>■ 理数コースの探究から普通科に広げていく際に苦労したことはあるか？ ⇒全クラスで足並みを揃えるのが難しかった。授業動画の作成、共通の最低限目標を定める等の対応をした</li> <li>■ DXルームにおける高価な機材はどう管理しているか？ ⇒機材管理は部活動の顧問やクラスの担任など分掌に応じて実施し、全校での機材管理体制を構築した</li> </ul>

# グループ協議① 発表内容

協議テーマ	参加校数 (グループ数)		グループ協議の発表内容
文理横断的・探究的な学びにおけるデジタルの活用方法	112校 (22グループ)		グループ4 <ul style="list-style-type: none"><li>● いかに関生成AIの活用を、生徒の探究的な学びに落とし込んでいくかという課題について議論した</li><li>● 解決策として、大学との連携を含む外部人材の活用や、外部人材による授業後の生徒自身による振り返りの実施などが挙げられた</li><li>● 各校は、保護者の同意を得ることや教育内容をさらに充実させる方法を模索している段階であった</li></ul>
生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進	82校 (16グループ)		グループ33 <ul style="list-style-type: none"><li>● 生徒の興味・関心を高めるため、各校がノウハウの蓄積や試行錯誤を重ねている状況であった</li><li>● その中で、生徒が楽しく学びながら課題解決にも取り組める環境をどのように両立させるかについて、協議の中で助言をいただいた</li><li>● 教員間や校内で取り組みを開示・共有し、互いに教え合う場をつくることの重要性について議論した</li><li>● 県内各校が持つ機器や知恵・アイデアを共有し、単独ではなく協力して進めることの重要性を認識した</li></ul>

# グループ協議② – 実施報告 –

